

新 歌人群像

扇畑忠雄

いぶし銀の存在

高橋宗伸



一 旅順でうぶ湯

おんたただお
扇畑忠雄は明治四十四年二月十五日、旧満州（現・中国東北部）の旅順に生まれた。父孫一、母ミサヲの長男で、父は当時旅順民政部に農林技師（兼旅順苗圃事務所長）として勤務するかたわら、果樹園を経営していた。忠雄八歳の時、父の急逝にあり、翌年母に連れられて広島県の祖父母の許もとに帰った。

十二歳の時、広島市に移居し、母子共々の生活が始まった。この頃の生活は容易でなく、文学的雰囲気などには縁遠い環境であった。当時を回想する歌に、

この家を去るまで友と交はらず或いは
尋ねくるを怖れて
(昭和39)

があるが、当時の生活環境の一端を垣間見ることができるといえる。

忠雄が広島県立第一中学校から広島高校（旧制）へと進む大正十二年から昭和六年にかけて、日本の時代は次第に軍の力が強まる傾向にあった。そうした流れの中で学校にも軍事教練等がとり入れられ、全体主義的なスパルタ教育が次第に濃くなりつつあった。その中で忠雄は文学少年にありがちなリベラルな（自由主義的）精神と、リリカルな（抒情的）文学的なものへの志向は、時代の反動と



「群山」月例会歌会であいさつする扇畑氏（平成元年ごろ）

して培われて行った。
その芽を育ててくれたのは、中学校では土井寿夫という英語教師であり、高校では「広高短歌会」を通して国語教師の北島葭江の指導が大きく影響した。更に高校後輩の近藤芳美等との交流によって作歌力の向上を見ることがができる。

京大英文学科から国語国文学科に転入学した忠雄は、沢瀉久孝教授のもとで『万葉集』の研究を専攻した。研究と作歌と二つの道を

歩むについて、沢瀉教授から「学と芸の総合を目指して欲しい」との激励を受けた。この激励が忠雄の一生を貫く指標となったことは間違いない。

大学卒業後の就職先は県立呉第二中学校であった。ここで彼は「呉アララギ歌会」に参加し、渡辺直己、坪田孟、菱川博義等の良き歌友ときそい合った。その後京都府立第一女学校に勤務した時は、京大短歌会、京都アララギ会などに所属し、小国宗碩、高安国世、金石淳彦等と交流した。

めぐる年をはるけくなれど思ひまさる
渡辺直己金石淳彦
(昭和48)

二 みちのく人

忠雄が二高教授として仙台に赴任したのは昭和十七年十一月であった。以来現在に至るまで仙台に居住しており、このことは学問の分野のみならず広くは東北の文化、東北の歌壇にとって極めて大きな意義を持つ。

その意味でも彼はみちのく仙台的の戦前、戦中、戦後を知る貴重な文化人である。近年加齢と共に好きな日本酒をたしなみながら「みちのく人」或いは「蝦夷の末裔」を自認する

だけでなく、会話にもややぎこちない仙台弁を交えるようになった。その要因となったひとつに、岩手県安代町に古代の豪族扇畑氏の遺跡の存在がある。

浪民の北べに扇畑とふ部落あり蝦夷の
首長の跡どころこれ

右の一首は同地を訪れた時のものだが、蝦夷の首長が囚えられて西に送られ佐伯部となつたが、自分はその末裔ではあるまいかと彼は本気になって考えるのである。

忠雄はもうすっかり「みちのく人」である。本業の歌評の後、二次会が楽しい。酒は日本酒党で好みは全国区であるが、特に好むのは郷里広島を筆頭に、秋田、山形などの酒である。興に乗じて「ピリカ」「熊まつり」などを歌い、やや感傷的になると「北上夜曲」、元氣旺盛のときは蛮声を張り上げて二高や広島高校の寮歌を歌う。

ここで忘れてならぬものが獄舎との長いかわりである。と言っても忠雄が獄舎につながれている訳ではない。実は宮城刑務所へ通い文芸指導を長く続けて来たのである。行刑施設である宮城刑務所では、収容者の情操教育、厚生補導の目的で文芸の創作を奨励していた。戦中の昭和十九年から短歌・俳句だけ

扇畑忠雄

の文芸誌「あをば」を月刊で発行していた。然も編集の一切は収容者の手によって作られているという全国でも珍しい雑誌であった。

そうした中で忠雄は、昭和二十三年から毎月一回同所の歌会指導に赴いた。そして歌会指導の外に月刊文芸誌「あをば」の短歌欄の選評にも協力して来たのである。

その「あをば」に斎藤茂吉の寄稿を得たことがあった。その歌は「とらつぐみ山の木立に啼くときに夜ふけむとしきりに寂し」というのであった。この歌は茂吉最晩年の歌集『つきかげ』所載で、昭和二十五年末の「雑歌」五首中の一首、箱根強羅滞在中の取材である。歌の内容は静寂でなぜか収容者の心を揺さぶるような響きがある。

昭和二十八年二月二十五日、茂吉の死去に際し、収容所の短歌同人達は茂吉先生のご厚志に応えるべく、御霊前に献歌させて頂きたいと、ひたむきに願ひ出た。その献歌十七首を忠雄は携えて会葬した。これらの歌は大判和紙に墨書され、作者名(実名)を記して茂吉先生の霊前に捧呈されたのである。

かくして忠雄の「あをば短歌会」の指導は、実に五十余年にも及ぶ長い奉仕ということになる。その功績が認められ、法務大臣表彰を受けた。

「群山」昭和二十七年十二月号の忠雄の作品六首は、宮城刑務所に長らく短歌指導に通った感慨を詠み込んだものであった。

死刑宣告受けしより歌作れりと幾首かに示す尚のこる生

ただ綴る君らがノートたどたと言葉つたなきまごころの歌

三 長つづきの根源

忠雄の作歌の歩みを概観するに、旧制広島高校在学中の昭和五年「アララギ」入会、中村憲吉に師事。昭和九年憲吉没後は土屋文明の選歌を受けた。昭和二十一年七月、東北アララギ会「群山」を創刊し、「アララギ」地方誌の編集代表者として、戦後の新しい短歌運動の前線に加わった。

「群山」は厳しい社会情勢の中で、合併号はあったものの順調な刊行を続け、平成十三年六月号で通巻六五〇号という記念すべきものとなった。従って忠雄の作歌経歴は何と七十余年に及ぶことになる。

このように作歌上でも歌誌編集上でも長期不倒記録の根源は何であったのか、それを彼にただしたことがあった。直ちに返った言葉



山形・金瓶の斎藤十右衛門家の庭園、同家は茂吉の疎開先、実妹の嫁ぎ先。向って左より高橋宗伸、本林勝夫、金子兜太、扇畑の各氏。

は、中学時代から一日も欠かさず日記をつけて来たという根気にある、というものであった。「群山」最近号(平成13年4月)の歌に次の一首があつて、その思いは深い。

中学の頃より一日だに落ちず書き継ぎし日記何のよすがぞ

忠雄の歌風の特徴は、一人の師である憲吉・文明を視座にする外はないが、外に茂吉を初めとする「アララギ」先進の影響を受けながら、自ら率いる「群山」の指導を通して



群馬県群馬町の土屋文明歌碑前にて、利枝夫人と（平成6年）

歌風を深化発展させてきたといえよう。

その歩みの中で文明と茂吉を尋ねたことは特筆すべきであろう。昭和二十年八月の敗戦の直前（六月二十三日）直後（八月二十一日）二回に亘って群馬県原町川戸に疎開中の文明を尋ねた。近くを散歩しながらの会話、そして文明の勧奨によって「群山」を創刊する。

山の辺の露のしげきに採みながら君に
副ひゆくいのち残りて

こぼれたる大根の種子を拾ひたまふ従
ふ吾の手にあまるまで

更に二十一年には疎開中の茂吉を山形の大石田に尋ねる。「群山」創刊の挨拶であり協力を乞う意味あいもあった。土産にカリンを貰った。「卸して熱い湯をかけ給え」と茂吉は言った。

癒えたまひ生命しづけき君ゆるるに暗き
に見ゆる沼も身に沁む

住む国を隣りて常にたのみにき今日は
正目に最上川と君と

忠雄の戦後の歩みで忘れてならぬのは、大
学紛争である。昭和四十二年四月から東北大
学教養部長となった忠雄は、以後数年間に亘
ってその渦中にあつた。四十四年九月、過労
のため教養部長を辞したが、次のような作品
によって当時の切実な心情を推察できる。

教室の壁に消さざる文字ありてすさび
行くごとし学生も吾も

石打ちてせめぎ合ふ群に氷のごとき心
にひとり立ちてありしか

封鎖解きて再び灯る実験棟しづかなる
雪はかの日忘れしむ

忠雄は平成十三年二月十五日、満九十歳の
卒寿を迎えた。近年来二度の手術をも克服し、
従来と変らぬ気力で月例の「群山」歌会の指
導や選歌を続けている。最近の作品に次のよ
うな歌があり、晩年の歌境の自在さと透徹が
見られる。

生きてみてこんなものかといふ声す自
らの声か或いは死者の
老いてなほ美しきものを吾は見む若か
りし日に見えざりしもの

この歌から「在るもの」を基とし「在らざ
るもの」の創造を目指す忠雄の写生論の次元
を見る思いがする。

第一歌集『北西風』の「あとがき」を再読
すると感銘を新たにす。その一節に「今ま
でみずから進んで歌壇に出ることを欲しな
かつた」とある。忠雄はこれ迄受けた表彰、叙
勲、短歌賞等々の祝賀行事を一切拒んで来た。
その姿勢は現歌壇に在っては正にいぶし銀の
如き存在といえよう。

（たかはし・そうしん「群山」「青南」）